子を守る福島の母たち

ドキュメンタリー映画　「小さき声のカノン」

福島第1原発事故で放射能汚染された福島県二本松市で、母親たちが子どもを被ばくから守ろうと奮闘する姿を追うドキュメンタリー映画「小さき声のカノン―選択する人々」（鎌仲ひとみ監督）が15日まで、北九州市八幡東区の東田シネマで公開される。一人ならつぶされそうな困難に、仲間をつくって立ち向かう汗と涙のサバイバル劇だ。

鎌仲ひとみ監督

被ばく防護、自ら動く

鎌仲ひとみ監督「問題はベールをかけず見る」

「小さき声のカノン」より　©ぶんぶんフィルムズ

二本松市には国の避難指示は出ていない。母親たちは避難か残るか悩む。カメラが追うのは、避難せず家族でとどまった母親たちのグループ「ママレンジャー」だ。支援食の集配を通じ結びついた。

国は健康に影響はないというが、自前で測ると相当な放射線量だ。リーダー格の母親は放射性セシウムが息子の尿から検出され、食品の放射線検査を自前で始めた。通学路の高線量の場所を見つけては自分たちで除染する。子どもの「保養」（休内被ばく軽減のための転地保養）にも取り組む。

しかし、心が傷つくことが少なくない。放射線への不安を語りにくい空気が広がっている。地元産米の給食に不安を感じ自炊米飯を子どもに持参させると周囲に波紋が起きる。甲状腺の無料検診では子どもに小さなのう胞が見つかって動揺したり、母親自身に腫瘍が見つかってほう然としたり…。心の襞にまで迫る映像に、「お母さん、頑張れ」と声を掛けたくなる。

一方で、福島市から山梨県へ子ども3人を連れて自主避難したシングルマザーを追う。強制避難ではないので支援が手薄で経済的に大変だ。子どもに高熱と嘔吐の症状があった。「足の裏の骨が痛い」とも訴える。被災者の状況に国はどこまで向き合えているのか、無策ではないのか、疑問が膨らむ。

★　★

この作品に骨太なメッセージ性を与えているのは、チェルノブイリ原発事故で子どもの甲状腺がんが多発するなど健康被害が相次いだベラルーシの取材だ。

元小児科医で多くの被ばく児を診療する一方、海外保養に子どもたちを送り出してきた母親、スモルニコワさんの言葉は説得力がある。

「チェルノブイリ事故当時、有名な教授が〝ここで生活して大丈夫〟と発言し、その発言が社会全体に拡散し人々は安心した。ところが子どもたちが病気になったり、障害を持つ子どもが生まれたりしました（中略）。言われていることが現実と違ったのです。でも医療関係者はそれを分かっていましたし、子どもたちのためにできるだけのことをしました」

ベラルーシの方が、居住できる放射線量の基準が福島より厳しい。実測値を基に汚染地図を将来予測も含めて作成・公表し対策に生かしている。国予算などで年計9万5千人の子どもを国内外に保養へ送り出す。生きる限り避けられない低線量の長期被ばくによる健康被害を少しでも軽くする目的だ。放射線防護をめぐる日本の支援の弱さがうかがえるエピソードが続く。

ベラルーシの被ばく児の保養を受け入れてきた実績があり、今は国内の保養児の受け皿となった北海道のNPO法人の婦人は「（保養支援を）やってもやっても国は助けてくれない。私たちは捨てられたんだよ」と嘆くのである。

★　★

鎌仲監督は言う。「日本では今、選択の自由が保障されていない。とどまった場合、放射線の防護対策が整っていない。避難したら経済的に厳しくなる。いずれも行政支援が十分でなく、子どもたちがおろそかに扱われている。それは基本的人権の問題です。そういう社会の在り方を良いもの、おかしいと声を出す可能性があるとすればそれは希望と呼んでいいのかもしれない。困難からは逃げない母親たちが輝いて見えてくる。

（吉田昭一郎）

通学路の草むらを自分たちで除染作業し引きあげるママレンジャーの母親たち

二本松市のママレンジャーの母親の一人が言う〝つらいことがいっぱいあるけど、ここに来れば元気がもらえる〟。本音で語り合える場で、支えあい、前に進む母親たち。国に頼らず自ら動く先に、国の施策を導のにしないといけない。そのためには問題にベールをかけずに見ないといけないのに、ものを言うと仲間はずれにされてしまうような息苦しい、生きにくい社会になっていないでしょうか。〝弱い立場の人たちが問題を訴えられない状態に居る〟ということを知らないといけない。そこは映画で伝えられたのではないかと思います」

◇4月5日午後12時半、同4時、西鉄イン福岡・大ホール（福岡市）で上映、中村さん＝090（8627）3076。5月9～22日は宮崎キネマ館（宮崎市）で。ガーデンズシネマ（鹿児島市）も近日公開予定。

エンタメ Entertainment 映画